

菊池力松一族による昔話伝承の実相

―「食わず女房」の場合―

小池 ゆみ子

はじめに

昔話はその土地に暮らしている人達によつて、その土地の言葉で語られてきている。遠野の昔話も同じように、遠野に住む人々の暮らしの中で、綿々と語り伝えられてきた。こうした暮らしの中に菊池力松さんも生きてきた。菊池力松さんは明治二二年岩手県上閉伊郡綾織村字長岡（現在の遠野市綾織町）に生まれた。農業を生業とし、明治四一年サノさんとの結婚で二男五女に恵まれた。現在遠野の語り手として活躍する菊池榮子さんは、力松さんの長男菊池嘉七さんの娘であり、力松さんの孫になる。鈴木サツさん、正部家ミヤさん、菊池ヤヨさん、須知ナヨさん達はおばにあたる。こうした範囲の人たちが、今回述べる菊池力松一族である。（以下一族の敬称は省略する）

力松は、語りの名手で地元では「力ほら」といわれた人であり、家庭では子ども達へさまざまな昔話を語って聞かせていた。^①「食わず女房」の話も力松がサツやミヤへ語り聞かせた昔話である。^②

息子の嘉七も力松から聞いたと思われる。^③一五歳で釜石の須知家へ養子に入ったナヨも、この話を力松から聞いたと話す。^④このように昔話「食わず女房」は父から子へと伝えられてきた話である。しかし、榮子は祖父力松や父嘉七からこの話を聞いてはいない。おば達の語りを聞いて覚えた話の中の一話である。榮子からこの話を聞くことができた現在、一族による「食わず女房」^⑤の話の伝承過程をたどることができるようになったと考える。

本稿は菊池力松一族が語る昔話「食わず女房」の中で、「男が唱える文言」「女が反撃に転じる場面」「化け物女の姿」をとり上げて語り口を分析する。「男が唱える文言」では可変部分と不変部分を、「女が反撃に転じる場面」では男の行動の違いと桶の設定について、「化け物女の姿」では女のイメージを示す。そして、これらを基に伝承過程でみえてきたことを考える。

資料と分析方法

分析にあたり、現在編集中の昔話集も含め七話の文字資料を

とりあげる。⁽⁶⁾ 分析の方法は、廣田收氏の論考より伝承表現構成を参考にした。⁽⁷⁾ 七資料はそれぞれを「発端句・転換句・結末句」「語り手の説明」「擬音語・擬態語・疊こむことば等」「唱えごと」「事柄」「基本的な事柄」の六項目に分けた。その中で、本論は「事柄」の1から15までの語り口の比較を試みる。

資料は以下に語り手と掲載書を記した。便宜上、出版年の順に『嘉七本』『サツ―1本』『サツ―2本』『サツ―3本』『ミヤ本』『ナヨ本』『榮子稿』とし、末尾の【付表】と対応する。

菊池嘉七 『遠野に生きつづけた昔』 佐々木徳夫編 一九七六

二五四頁。

鈴木サツ 『遠野の昔話』 佐々木徳夫編 一九八五 三六二頁。

鈴木サツ 『遠野むかしばなし 鈴木サツ自選50話』 工藤絃一編 一九八七 二八頁。

鈴木サツ 『鈴木サツ全昔話集』 小澤俊夫・荒木田隆子・遠藤篤編 一九九三 四二頁。

正部家ミヤ 『正部家ミヤ昔話集』 小池ゆみ子・小林美佐子・田

中浩子・丸田雅子編 二〇〇二 七四頁。

須知ナヨ 『釜石 須知ナヨさんの語る昔話』 大野眞男・竹田晃子編 二〇一三 二九頁。

菊池榮子 (菊池ヤヨ、須知ナヨの語りも含めて『正部家ミヤ昔話集』の編者四人で発刊準備中である)

話の構成

昔話「食わず女房」は、発端で飯を食わぬ嫁を欲しいという男のところへ女がやって来る話である。一族の話のモチーフ構成を次の1から6に示した。

- 1、飯を食わぬ嫁が欲しいという男のところへ、飯を食わぬから嫁にしてくれという女がやって来て嫁になる。
- 2、男は不審をいだき、町へ行く振りをして馬屋桁から見ていると、女は頭の口で片馬の米の握り飯と大蒜三把を食べる。
- 3、男は知らぬ振りをして家に入る。女は腹が痛いと言いつつ、男は男が正体を見たことに気がつき、桶ごと男を担いで山へ帰る。
- (a) 女は男をつかまえて桶に入れる。
- (b) 女がつかまえるようにするので、男は桶に隠れ込む。
- 5、男は枝をつかんで桶から飛び出し、菖蒲と蓬の中へ逃げ込むので、女は退散する。
- 6、その日が五月節句だったので、菖蒲と蓬を軒に挿し、菖蒲湯に入る。

一族の話は拙論で分類した退散型である。⁽⁸⁾ その中でも特徴が二点ある。一点はモチーフ3の唱えごとが入ることであり、もう

一点はモティーフ4で(a)と(b)に分れて男の行動が異なる。

遠野に伝承する話をみると、女が腹痛を起こし、男が文言を唱える話以外に、女が腹痛を訴えても唱えことが入らない話、女は男を桶に入れずに山へ連れて行く話、男は山へは行かず菖蒲と蓬の中へ逃げ込む話等が分布している。その中から一族のように腹痛の後に唱えことが語られる話をとり上げると、文言は「五斗俵の祟りか、鯉六連の祟りか」「牛蒡人參の祟りか、握りこの祟りか」「鯉六連の祟りか、四斗俵の祟りか」「三束三把の祟りか、隣の葱の祟りか」「にぎり飯四十、鯖六十の祟りだ」等と語り手によって異なっている。しかし、一族が語る唱えことの文言は「米かだまの祟りか、大蒜三把の祟りか」である。

事柄の分析

事柄1から事柄15までを【付表】も交えながら分析する。

男の不審

〈事柄1 男がいる〉

男は独り者である。『嘉七本』では男の職業は「桶屋」である。『サツ—1本』では職業は語らない。職業を語らないことは「榮子稿」まで続いている。

〈事柄2 男は女を不審に思う〉

表中の網掛けの部分は、男が女に不審をいだく理由である。

『嘉七本』で、男は飯を食わぬ嫁に喜びながら不思議に思う。『サツ—1本』では本当に食わぬかを試そうとする。『サツ—2本』では不審をいだく理由が、嫁は食わぬのに米が減る、と具体的になる。この語り口は「榮子稿」まで続いている。『ミヤ本』は、より具体的になり、米びつに印を付けて確認をしている。

減っていく米が入っている場所は『サツ—3本』では「きしね櫃」に、『ミヤ本』では「米びつ」に、「榮子稿」では「小屋」である。米が入っている道具の言葉が「きしね櫃」から「米びつ」へと動いてきている。この変化は、言葉が生活に結びつけられてきたものと考えられる。

〈事柄3 男は町へ行く振りをする。女は大蒜を欲しがる〉

不審をいだいた男は町へ行く振りをする。表中の網掛けの部分は、女が大蒜三把を買ってきてくれと頼む部分である。網掛けは『嘉七本』と『サツ—1本』にはない。『サツ—1本』では、男が町へ行くと言うが、女は男を促すだけである。しかし『サツ—2本』からは、大蒜を頼む語りがはっきりと加わっている。『サツ—2本』で、大蒜は家にはないと設定したと考えられる。この語り口は「榮子稿」まで変わらずに続いている。

〈事柄4 男は女の様子を上から覗く〉

七資料とも、男は町へ行かずに家の上部位置から覗く。場所は『嘉七本』の「屋根」が『サツ—1本』では「馬屋桁」へ変

わり、そのまま「榮子稿」まで続いている。この場面で「榮子稿」では、男は大蒜三把を近所から手に入れて馬屋桁へ上がっている。しかし『サツ―2本』『サツ―3本』『ミヤ本』『ナヨ本』では、大蒜のことは語っていない。

女の正体

〈事柄5 女は米をかだま出してくる〉〈事柄6 女は飯を炊く〉
〈事柄7 女は握り飯を作る〉

男が居なくなると、女は片馬の米を持ち出してきて握り飯を作る場面である。この話の山場の一つである。

女が持ち出してくる米の場所は、『嘉七本』では米蔵である。『サツ―1本』から『ナヨ本』までは、米は家の中に置いてあると考えられる。しかし、(表A)〈事柄2〉で、『サツ―3本』では、男が不審をいだいた米はきしね櫃に、『ミヤ本』では米びつに入っている。女が持ち出してくる米の場所とは異なっている。『榮子稿』では、女が持ち出してくる米は小屋にあり、男が不審をいだいた米も小屋で同じ場所にある。『榮子稿』の語りは合理的に整えられていると言える。

表中で示した囲みから、米がどこに入っているかがわかる。『サツ―1本』『サツ―2本』『ミヤ本』では「吠」に入っている。「榮子稿」では「袋」である。ここにも言葉の動きがみられる。「吠」から「袋」への変化も、生活の言葉に結びついてきていると考えられる。

また、「榮子稿」では女は握り飯を「伸す板の上さ」並べる。「伸し板」は「榮子稿」で加えられた道具である。現実の生活感覚が語り口に現れていると言える。女が米を炊く釜は『嘉七本』では「馬釜」だが、『サツ―1本』『サツ―2本』『サツ―3本』『ナヨ本』では「土間の大きな釜」で、「馬釜」という言葉を使っているのではない。『ミヤ本』と「榮子稿」は「馬釜」である。『ミヤ本』では、置かれてある場所がはっきりしないが「榮子稿」では土間^{にわ}にある、とはつきり語っている。

『サツ―2本』では、片馬の米がどのくらい大量かを、三斗五升と具体的な容量でわかりやすく説明が加えられている。

『嘉七本』では、握り飯を作る女の行動は簡単に語られているが、『サツ―2本』からは、たつぷり語られている。大量の米で飯を炊き、握り飯を作る女の行動に擬音語や擬態語が使われている、この場面が目に見えるようである。

揺れ動く「大蒜三把」

〈事柄8 大蒜三把〉

『嘉七本』『サツ―1本』では、女は米を炊いて握り飯を握ると、家にあつたと思われる大蒜三把を出してくる。しかし『サツ―2本』以下は、大蒜について全く語っていない。ということは『サツ―2本』以下では、大蒜三把は家にはなかったと考えられる。そこで(表A)〈事柄3〉の網掛け部分で示したが、女は男に「町へ行くなら買ってきてくれ」という運びになっている。

〈事柄9 女は頭の口で食べる〉

女が頭の口で食べるものは、『嘉七本』『サツ—1本』『ミヤ本』は握り飯と大蒜である。『サツ—2本』『サツ—3本』『ナヨ本』『榮子稿』では、頭の口で握り飯だけを食べる。ここには大蒜は登場しない。その理由は、『嘉七本』『サツ—1本』では大蒜三把は家にあつた。しかし『ミヤ本』は曖昧である。男に町へ行くなら大蒜三把を買ってきてくれと頼んでいるが、大蒜三把は『嘉七本』『サツ—1本』と同様に家にあつたことになり不整合である。『ミヤ本』では、語り口の中の大蒜三把が現れる位置が、大きく揺れ動いていると言える。

〈事柄10 男は知らない振りをして家に入る〉

男は馬屋桁から降りると、女には町から帰って来た振りをする。『ミヤ本』と『榮子稿』では表中に太文字で示したが、女に頼まれた大蒜を男が持ち帰ったという語りである。

また『嘉七本』では、男が「今帰って来たじえ」と言いながら家へ入る。『サツ—1本』でも同じように言いながら入る男に、女は「早がったなます」と返答をする。二人がやりとりをする語り口は『榮子稿』まで変わらずに続いている。

唱えごと

〈事柄11 女は大蒜三把を平らげる〉

女が男から渡された大蒜を平らげるのは、『サツ—2本』『サツ—3本』『ナヨ本』『榮子稿』である。『嘉七本』『サツ—1本』『ミヤ本』では、女はすでに頭の口で握り飯と一緒に大蒜を食べたと語っているので、ここでは大蒜を食べない。しかし、男が大蒜三把を家に持ち帰ってきたのは『ミヤ本』と『サツ—2本』『サツ—3本』『ナヨ本』『榮子稿』である。

この場面では女が平らげる大蒜を(表A)〈事柄3〉(事柄4)と(表C)〈事柄10〉との語り口の関係を交えながら再確認をする。(表A)〈事柄3〉の段階では『嘉七本』『サツ—1本』では大蒜は家にあると思われる。町へ行くという男に、女は大蒜のことを言わないからである。『サツ—2本』『サツ—3本』『ミヤ本』『ナヨ本』『榮子稿』では、女は町へ行くと言う男に大蒜三把を買ってきてくれと頼んでいる。しかし男は町へは行かなかった。にもかかわらず、男から渡された大蒜を平らげるのは『サツ—2本』『サツ—3本』『ナヨ本』『榮子稿』である。頼まれた大蒜を持ち帰ってくるには、大蒜をどこで手に入れたてはならない。どこで手に入れたのだろうか。『ミヤ本』では(表C)〈事柄10〉に太文字で示したように、男は馬屋桁から下りて家へ入る前に、大蒜を手に入れたようである。『サツ—2本』と『ナヨ本』では入手方法がはっきりしない。『サツ—3本』で表中に太文字で示したが、大蒜を買ってきたようだ。しかし男は町へは行かなかったので不自然である。『榮子稿』の(表C)〈事柄10〉では頼まれて買ってきた大蒜だと言って女に渡す。この大蒜はすでに(表A)〈事柄4〉に

太文字で示したが、男が馬屋桁に上がる前に近所で手に入れた大蒜である。女が平らげると大蒜は、この大蒜である。そして（表D）〈事柄11〉の「榮子稿」の囲みで表した「その」という指示語で示している。このように、大蒜の位置がはっきりして、話の運びがすっきりと整っている。

〈事柄12 女は腹痛を起こす〉

『嘉七本』では、男が家に入ると女は腹痛に苦しんでいる。『サツ―1本』では、男にだけ夕飯を食わせた後に、女は腹痛を起こす。この語り口は「榮子稿」まで続いている。腹痛は夕方から夜にかけて始まる。その様子を『嘉七本』では、女は「腹痛い」と苦しむ。『サツ―1本』では、腹痛が始まった、と事柄だけを語る。『サツ―2本』は「転んであるぐほど」と、痛みみの状況説明が具体的に加わる。この語り口は『サツ―3本』『ミヤ本』『ナヨ本』まで続く。しかし「榮子稿」では大層な痛みではあるが「転げまわる」という状況説明はない。

〈事柄13 男は女の傍へ行く〉

男は女が恐ろしい化け物であることを知っている。にもかかわらず、女の傍へ行ったり腹を撫でたり、と警戒心のない行動である。これらは、この状況の中でとった男のやむにやまれぬ精一杯な行動と考えられる。

〈事柄14 男が唱える文言〉

七資料で「米片馬の祟りか、大蒜三把の祟りか」という文言は変わらない。『ミヤ本』で大蒜を先に言うことはあるが、言葉に変化はない。遠野の話の中で、一族以外の文言を前述したが、これらを見ると大量の米の飯は共通していた。しかし副食物は語り手により変わる。米の飯以外は可変部分である。この可変部分が、力松一族は「大蒜三把」である。そして、一族にとつて唱えことの文言「米片馬の祟りか、大蒜三把の祟りか」は動かすことのできない不変部分であると言える。

女の反撃

〈事柄15 女は男を桶に入れる。男は桶に隠れ込む〉

前述したモチーフ構成4の場面である。

4、女は男が正体を見たことに気がつき、桶ごと男を担いで山へ帰る。

(a) 女は男をつかまえて桶に入れる。

(b) 女がつかまえてやうとするので、男は桶に隠れ込む。

『嘉七本』が(a)にあたる。(b)にあたる部分は『サツ―1本』に現れている。その語り口は『サツ―2本』『サツ―3本』『ミヤ本』『ナヨ本』『榮子稿』まで続いている。

(a)と(b)で男の行動の違いと桶の設定の違いとが結びつくと考えられる。『嘉七本』では、女が入れる桶は、桶屋の男が作った桶である。『サツ―1本』の男が隠れ込む桶は、日常の

生活道具である。『サツ―2本』『サツ―3本』『ナヨ本』『榮子稿』でも男が入る桶は、土間や戸外に置いてある生活道具である。『ミヤ本』は「大きな漬物樽」であり、桶の用途が具体的に現実の生活感覚が語り口に現れている。この場面では、女は男を桶に入れる、男は桶に隠れ込むと異なっても、女は桶ごと男を担いで山へ帰る、という話の構成は変わらない。

女は男を食おうとする魔物である。この場面は腹痛に苦しんでいた女が、突然男を襲う場面である。ここから女の反撃へと話はダイナミックに展開していく。

『嘉七本』では、女は男を瞬時につかまえて桶に入れる。この時「お前、見だな」と語るが、この一言が場面展開を力強くうながす。『ミヤ本』『榮子稿』にもこの一言が語られている。⁽¹¹⁾

『サツ―1本』では女が男を取って食おうとする。『サツ―2本』からは、女がつかまえるようにする様子、男が逃げ回る様子がたつぷりと語られている。表中の点線は女の行動を示し、太い線は男の行動を示した。『サツ―2本』『サツ―3本』『ナヨ本』では、男を取って食おうとする女の行動が具体的に目に見えるようであり、臨場感を増す語り口になっている。一方『榮子稿』では女の行動は具体的ではない。しかし「お前、みてらったな」と「今度アお前、とって食んねもねえ」の二言が女の行動を鮮明に表わしている。そして男の行動は「あっちゃ逃げ、こっちゃ逃げして」と簡潔である。

反撃に転じた女を、それぞれがどのようにイメージしているの

だろうか。『嘉七本』では化け物である。『サツ―1本』で、女は鬼の姿に変わっている。『サツ―2本』『サツ―3本』『ミヤ本』『ナヨ本』に「鬼」という言葉はない。しかも『ミヤ本』では「山母」である。「鬼」という言葉がなくても、「山母」であっても、鬼の姿を具体的に想像させる語り口になっている。しかし『榮子稿』では『嘉七本』同様に具体的な姿を語っていない。女の姿のままと考えられる。このように、女の身のままで男を食おうとする姿には、不気味さが加わる。反撃に転じた女は、恐ろしさと妖怪性も含めて多様にイメージされていると考えられる。

まとめ

現在、菊池力松がこの話をどのように語ったのかはわかってはいない。一族以外で、唱えごとが加わる遠野の話をみると、唱えごとの文言は、女が食う大量の飯は共通している。しかし、飯以外が語り手によりさまざまであり、可変部分である。一族に伝承されている可変部分が「大蒜三把」である。伝承過程でサツは大蒜が家にはないと設定し、女は男に町へ行くなら買ってきてくれと語った。この語り口は榮子まで続いている。しかし、サツの語りは、町へ行かなかった男が、どのように大蒜を手に入れたのかは曖昧だが、男は大蒜を女に渡す。そして女は、その大蒜を平らげて腹痛を起こす。この大蒜が、唱えごとの文言へと繋がっていく。ミヤの語りは、大蒜の入手方法が大きく揺れ動いたが、文言へ繋がっていく。このように、一族に

とって唱えごとの文言「片馬の米の祟りか、大蒜三把の祟りか」は、決して動かすことができない不変部分である。サツとミヤの音声資料を聞くと、二人が語る唱えごとはリズムを伴っている。リズムを伴った言葉は記憶に残りやすく、唱えごとは力松の声の記憶と共に伝えられてきたものであろう。

女の反撃場面では、女が男を桶に入れるのか、男が自分で桶に入るかの違いがあつた。その違いは桶が職業として作る桶か、日常生活道具かの違いと結びついていく。違いはどちらであつても、女は桶ごと男を担いで山へ帰る、という話の構成は変わらない。男の職業を桶屋とした嘉七は、実生活で大工だつた。同じ職人として通じるものがあつたのかもしれない。

男を食おうとする化け物にいたくイメージは、それぞれ多様である。鬼や山母等の人間以外の姿に変わるばかりでなく、女の姿のまま男を食おうとする不気味さもイメージされている。

ところで、一族の話の中で米の置き場所は「米蔵」「座敷の奥」等にあるが、榮子では「小屋」へと変わった。サツの「きしね櫃」という言葉は、ミヤの「米びつ」へ、米の入った「吠」は、榮子の「袋」へと言葉が動いている。人が昔話の聞き手から語り手となる中で、言葉の変化は、その人の生活に結びつけられていると言えよう。生活の変容が昔話の言葉の変化をもたらしている。すでに、こうした言葉の変化については指摘されている¹²。人には自分が生きている時代そのものが「現代」である。それゆえに言葉が「現代」の生活の言葉に結びつけられて

いくのである。一族の語り口の中にみえる言葉の変化は、昔話のもつ「現代性」に通じる、と考えている。

一族の中で、サツとミヤは聞き手の多彩さと人数において際立っている。遠野の語り部として観光の最前線に生きてきたと言えよう。その中で、聞き手にわかりやすい語り口になることもあつた。この話の中には「馬釜」を「土間の大つき釜」と語り、片馬の米に「三斗五升」と説明が加わることも自然である。しかし、山場の一つの握り飯を作る場面では、女の行動に擬音語や擬態語がたつぷり使われて、聞き手を話の中へ引き込んだ。女が反撃に転じるダイナミックな場面では、男をつかまえようとする女の姿、追いかける様子が目に見えるように語られて、臨場感が増した。遠野の言葉の美しい響き、豊かな言葉、心地よいリズムを多くの人々が楽しんだ。

榮子は「俺^{おれ}ア、たんだ、おばちゃんたちの街道^{けんど}ア、そのましま歩^{あり}つて来ただけだから」と話す。おば達から何度も聞いて覚えた榮子の語りは、合理的で整ったすっきりした語りになっている。合理的な語りは嘉七に近いと考える。男が女に不審をいだいた米は、女が持ち出す小屋の米であり、小道具に無駄がない。マックス・リュティがいう経済性が考えられる¹³。榮子は、男が住む曲がり家の土間に馬釜があり、空桶も置いてある。道具の位置がはつきりとしている。外には小屋があり、大蒜も近所からもらつてきている。この話の場面がしっかりと描かれている。そこには榮子の生活感覚や個性も考えられる。力松から

榮子へ繋がるささやかな例ではあるが、口伝えの話が自らを軌道にのせていくという力の可能性も考えながら、今後の研究を進めていきたいと考えている。¹⁴⁾

最後に一族の現在について記しておきたい。嘉七さんは力松さんと共に昔話「天人子」の曼荼羅があるという綾織の光明寺に眠る。サツさんは昔話「池の端の石臼」の石碑がある柳玄寺に眠る。ミヤさん、ヤヨさんはご家族や地域の人達の温かい支えの中で心豊かな日々を過ごしている。ナヨさんは釜石で語りの会を主催し語り手を育てている。榮子さんは遠野を訪れる人達や地元の子どもの達の前で語る。そして、元遠野物語研究所長高柳俊郎氏の「子ども達へは、語って聞かせるという意気込み、深さがないと伝わらない。子ども達は受け取れる力を持っている」という言葉を大切にしている。

付記 本稿は第三十九回日本口承文芸学会大会（二〇一五年六月七日 國學院大學渋谷キャンパス）の口頭発表を整理し加筆したものです。ご来聴いただきました皆さまへ感謝します。そしてご教示を賜りました先生方へ心よりお礼を申し上げます。

注

(1) 小澤俊夫・荒木田隆子・遠藤篤編『鈴木サツ全昔話集』鈴木サツ全昔話集刊行会 一九九三 三〇九頁。

(2) 注(1)に同じ 三四五頁。小池ゆみ子・小林美佐子・田中浩子・丸田雅子編『正部家ミヤ昔話集』小澤昔ばなし研究所 二〇〇二 三一〇頁。

(3) 昭和六二年二月『広報とおの』第四四九号には一月に開かれた「第4回遠野昔ばなし祭り」で嘉七、サツ、ミヤ三人が語っている写真が載っている。この時「食わず女房」が語られている。この昔話はきょうだいお互いが語り合い、聞き合いながら伝えてきている。

(4) 力松の語りは一話だけ文字化されている。國學院大學民俗文学研究会が編集し発行した『伝承文芸 第六号 岩手県南昔話集』の中に、力松の昔話「お月お星」が載っている(二二頁)。巻末の「採集昔話名」には綾織町上綾織長岡で「13お月お星」「14食わず女房」「15鼠浄土」の三話がある。「話者紹介」では長岡の語り手は力松一人であることから、七七歳の力松が三話を語ったと思われる。

(5) 嘉七とサツが語るこの話の比較は、二〇〇一年、遠野市での語り部教室で論じられている。石井正己著『昔話と観光—語り部の肖像』三弥生書店 二〇一二 一二二—一二八頁。

(6) 須知ナヨの文字資料は以下の報告書から転載した資料である。大野眞男・竹田晃子編『釜石 須知ナヨさんの語る昔話』平成二四年度文化庁委託事業報告書「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究(岩手県)」別冊・被災地の言語文化資料 岩手大学

二〇一三・三・一〇。

- (7) 『昔話「鼠浄土」』と唱え言—伝承表現論をめざして—『人文学』二六〇 同志社大学人文学会編 一九九六 一五六頁。
嘉七の表現表を作るにあたり、二〇一四年二月一日、東京学芸大学フォーラムで廣田收氏にお目にかかった折に私的示教を受けた。その表を基に七資料の表現表を作表した。
- (8) 小池ゆみ子「昔話「食わず女房」のオノマトベの研究」『昔話研究の諸相 小澤俊夫教授喜寿記念論文集』小澤俊夫教授喜寿記念論文集編集委員会編 二〇〇七 三三九頁。
青森県から沖縄県に伝承されている五四〇話は退散型と退治型二つのサブタイプに分類できる。この話は女が正体を現す場面にさまざまな変化があり、退治型は西日本に、退散型は東日本に主として分布する。退散型は男を桶に入れるという話が多いとはいえないが、ほとんどの話に五月節句の由来話が付く。また、腹痛を起こした女に男が唱えこたをいう話は広く分布してはいない。岩手県以外には広島県、鳥取県などにみられる。
- (9) 注(8) 拙論 オノマトベは「頭の口で食べる様子」と「嫁が火を焚き、大量の米の飯を炊き、握り飯を作る様子」の部分で多く使われている。
- (10) 注(5) に同じ。嘉七の語りは人物と道具が密接に対応していること、サツの語りの桶は単なる生活道具であることが指摘されている。一二六頁。
- (11) 筆者はミヤからこの話を五回聞いてきた。一九九三年から

二〇一二年までの間で聞き手の異なる場での語りであるが、この一言は五回の語りに必ず現れていた。ミヤにはこの場面のキーワードになっていると思われる。

- (12) 石井正己氏は、昔話とは「生活者が伝える言語芸術である」を述べている。『昔話の継承』の現代性『昔話—研究と資料—第四二号』二〇一四 七三頁。

- (13) マックス・リュティイ著(小澤俊夫訳)『昔話 その美学と人間像』岩波書店 一九八五 二三二頁。

- (14) 小澤俊夫氏は「昔話は、口で伝えられているかぎりは、ある一定の幅以上には変化しません。口で語り、それを聞き手が耳で聞くという行為のなかでは、ある幅をこえて複雑化したり詳述したりすると、耳で理解できる限度をこえてしまうからです。」と述べている。小澤俊夫著『昔話の語法』福音館書店 一九九三 三五—三五三頁。

〔参考文献〕

- 氏家千恵「昔話の保存部分と自由部分に関する一考察—言語テクストの伝承における〈解釈行為〉の意味—」福田晃編『日本文学の原風景』三弥生書店 一九九二。
- 黄地百合子「奈良県の語り手、松本イエ・智恵子の昔話—『声の記憶』について考える—」『昔話—研究と資料— 第三八号』二〇一〇。「昔話伝承における会話表現の働き」『口承文芸研究 第三十五号』二〇一二。

(表A) 男の不審

事柄	『嘉七本』	『サツ—1本』	『サツ—2本』	『サツ—3本』	『ミヤ本』	『ナヨ本』	『榮子稿』
1男がいる	何かにも欲の深い桶屋がいたづまな。	ある所に何もかも欲深く、嫁になつて、「嫡も物食ねで稼ぐ嫁御欲しど、いつも思つた男あつたらずもな。	あるとこに、なにもかも欲ア深くて、人さゝめ食せたくねえ男あつたらずもな。	あるどこなにかにもしんぶく者で、この男ア、ほんとに出すんだら舌も出したくねえ、四十過ぎでからも女房ももらねえ、もすつて、女房ももらねえでいらつたずもな。	あるどこに、男、あつたずもな。年頃になつたら、 <u>「ががもらえ」</u> つても、 <u>「飯食うががば、要らねます」</u> つて言つたずもな。	あるところに年頃の若者いたつた。	
2男は女を不審に思う	なるほど言つた通り、おままと食ねえで毎日うんと稼ぐもんだから、これはいい嫁御が授かつたと思つたけども、なんとも不思議なんで、	何日が経つてがその女子ほらんに飯食ねが <u>いづべえだつた</u> 氣なつて、	きしね櫃見れば、なんぼしても、 <u>わ</u> より、米して食うた違つたつたずもな。	いつか試して見る気したずもな。米びつり、印つ付けたいと。そしたところ、食ねえわりに、 <u>米がつぱ、がつぱとなくなつてつずもな。</u>	そのがが、飯食ねなりに、あなたが、 <u>米の減りよう、いづべえだつたずもな。</u>	なんと小屋の米、われ一人食うより減つてらつたずもな。	
3男は町へ行く振りをする 女は大森を欲しが	ある日のこと、用をこせて	「町さ行つてくつから」て喋つたずもな。 <u>「ほだらば行つてお出れ」</u>	あるとき、「町さ行つてくつから」て言つたずもな。したば、その女ア、「おんでれ、おんでれ」つて、「したら、にんにく三把買つておんでれや」つて言つたずもな。	ある時、町へ行くと、今日、おれ、町へ行つてくつから「出はつたずもな。」したところ、その女イ、ハイ、行つておにんにく三把、買つてきてけけん、 <u>「おでれ」</u> つたずもな。	ある時、その姉っこさ、俺、町を行つてくつから「今」つて、言た。そして嘘ふいて出はんべつとした。その姉っこア、「町へ行かば、にんにく三把、買つてきてけけん、 <u>「おでれ」</u> つたずもな。それ聞いて、その旦那殿ア出はつたと。		
4男は女の様子を上から覗く	町さ行く振りをして、そうつと屋根さがつて様子を窺つたず。	男は町さ行く振りで、馬屋桁上がつて見ていだずもな。	その男ア町さ行つてくるふりして、馬屋桁さがつて、見てらすもな。	出はつて、行く振り出す、そちからぐるーつと回つて、馬屋桁さがつたずもな。	家、出はつて、そして町さ行くふりして、またけたさがつて、隠れいでいだずもな。	あたりさ行つて、にんにく三把もらつてきて、馬屋の桁さがつたずもな。隠れて見てらと。	

5女は米をかだま出してくる
6女は飯を炊く
7女は握り飯を作る

76

(表C) 揺れ動く大蒜三把

事柄	『薔七本』	『サツ—1本』	『サツ—2本』	『サツ—3本』	『ミヤ本』	『ナヨ本』	『榮子稿』
8 大蒜三把	大蒜三把出して来て、	大蒜三把持つて来て、					
9 女は頭の口で食べる	頭の上の大つきな口さ握りコと大蒜をつたげに投げ込んで、たちまち平らげたつものな。	頭の頂上に大つきな口あつたけ。それさ握りコと大蒜、ボンボンボンボン投げ込んで、かだまの米すっかり食ってしまったずものな。	頭の中の大つきな口アあつたつた。さあ、その女ア、その飯、握りつコにぎって投げ込み、三斗五升の米すっかりはあ、その口サ食ってしまったずものな。	頭の中におつきな口あつたつた。その片馬の飯煮たの、握つて投げ込み握つて投げ込み、みんな食つてすまつたずものな。	頭の真中に大きな口あつたつたんだと。これ、化け物だが、なんたなとするんだべ、と思つて見でらどころ、その片馬の煮た米、握つては投げ、握つては投げ、その頭の口から、べらり食つてしまつたんだと。そして、傍にあつたにんにく三把、べろつと食つてすまつたずものな。	その飯、握りつコにぎつて、頭の中の大つきな口さ、にぎつては投げ込み、にぎつては投げ込み、片馬の米、すっかりその大きな口で、食つてすまつたずものな。	その握りつコ取つて投げえ、取つて投げえして、その大つきな口さその片馬の飯、みんな投げて入れてしまつたずものな。
10 男は知らない振りをして家に入る	知らね振りして、「今帰つて来たじえ」って、おっかなおっかな	ちゃんと髪結つて知らね振りして「だど」さ、「いま来たじえ」って、入つたずものな。そして、「早がつたなます」って、	いづまでも馬屋桁にもいられぬえがら、町サ行つてきたふりして、下りで来たずものな。そして、「今来たじえ」って、早がつたなます「早がつたなんす」って、	いづまでも馬屋桁にばりもいらぬえがら出はつて、帰つてきたふりして、「いま来たじえ」って、早がつたなます「はやかつたなます」って、	いづまでも馬屋桁さ上がつてゐるわけにもいかぬえから、夕間方さなつたから、にんにく三把握んで、帰つてきたと。「ほれ、今来たじえ」帰つてきたずものな。したつて、女房さま、その時はちゃんと髪を直して、結い直して、りっぱな女房さまになつてらつたと。「早かつたます。そだら、入つてがんしえ、入つてがんしえ、夕飯仕度してらから」中さ入つたずものな。	いづまでも、まやけに居られぬがら、町さ行つて来たふりして、「今来たじえ」や「つたずものな。そのおなうしてば、そのおなうしてば、早がつたなます」って、その時はあ、髪、立派に結つてらつたと。	その男ア見たども知らねえふりして、「じゃあ、今来たじえ」って言つたと。そうしたつけ、その女房「早かつたな、もし」って頼まれたにんにく、お前に「こりや、買つてきたぞ」って言たと。

(表D) 唱えごと

事柄	『嘉七本』	『サツ―1本』	『サツ―2本』	『サツ―3本』	『ミヤ本』	『ナヨ本』	『榮子稿』
11女は大蒜三把を平らげる		夕飯仕度して食 せで、われ食ね で寝だどころ が、	その旦那殿サ仕 度して食せだす もな。その時、 その女ア、ニン ニク三把、ペ ロッと食つてし まつたすもな。 そして寝だつた すが、	その男さ、仕度 して食せたすも な。われハ、食 ねずす。にんに く三把買つてき てば、そのにん にく三把、ペろ り食つてすま たすもな。	その時もちゃんと夕 飯仕度してでから、 旦那殿さ食しえだど。 そして、寝たすもな。 そうしたところ、そ の晩げ、その女房さ と。七転八転病んだ ど。	そして、寝だつたす が、そのおなご、夜 中に、腹、痛み始め たすもな。なにもが なにも、そごいらじゅ う、転んで痛み出し たすもな。	その女房、 そのにんにく 三把ペろーつと食つてし まつたすもな。
12女は腹痛を起こす	家中さ入った み始つたすも な。 嫁御が、「ああ、 腹痛い。腹痛 い」て苦しん でたすもな。	その噂さま腹痛 に腹痛み始めだ すもな。まんつ はあ、なにもか にも、ここいら じゅう、転んで あるくほど、腹 病みしたすも な。	その女ア、夜中 に腹痛み始めだ すもな。まんつ はあ、なにもか にも、ここいら じゅう、転んで あるくほど、腹 病みしたすも な。	その晩げ、その 女アうんと腹痛 みしたすもな。 それこそ、そこ いらじゅう、こ ろすまろず病ん だすもな。	その女房さ と。七転八転病んだ ど。	そして、寝だつたす が、そのおなご、夜 中に、腹、痛み始め たすもな。なにもが なにも、そごいらじゅ う、転んで痛み出し たすもな。	その夕方、その女房、腹 痛みしたと。さあ、う んと腹痛みしたしたすも な。
13男は女の傍へ行く	桶屋は、「どれ、 俺が呪つてや れるから」て、 腹をさすりな がら、	「どらどら、お れ呪いことして けっから」て 喋つたすもな。 そして噂の傍さ 行つてがらに、	その男ア、「ど らどら、おれア、 呪ごととしてけ るからよ」って、 言つたすもな。 その女ア寝で どこサ行つて、	その男ア、「ど らどら、おれ、呪 ねえこととしてけ るからよ」って、 ががのそばさ 行つて、手合せ たすもな。	それ見て、その旦那 殿ア、「どらどら、お れ、呪つてけっから」 言つたすもな。	その男、「どら、どら、 俺、まじないごど、 してけるがらよ」つ て、その女ご、寝で だどこサ行つて、	それ見た旦那殿ア、「どら どら、俺、呪つことして けっから」言たと。そう して女房の腹、撫でなが ら、
14男が唱える文言	米かだまの祟 りか 大蒜三 把の祟りか	米かだまの祟 りが 大蒜三把 の祟りが	米片馬のたたり が、ニンニク三 把のたたりが	米片馬の祟りか あ、にんにく三 把の祟りかあ	にんにく三把のた たりか、米片馬の祟 りか、(2回繰り返す)	米片馬のたたりが、 ニンニク三把のた たりが	米片馬の祟りが、にん にく三把の祟りが

(表E) 女の反撃

事柄	【嘉七本】	【サツ―1本】	【サツ―2本】	【サツ―3本】	【ミヤ本】	【ナヨ本】	【榮子稿】
15女は男を桶に入れ る男は桶に隠れ込む	て言つたら、 化け物の嫁御 が、「お前、見 だな」で、ガ バツと起きて、 傍にあった桶 さ入れたど。	て言つたずも な。そうしたら その女子、見ら れだと思つたが ら、鬼になつて 取つて食んべど したんで、小屋 さ逃げ込んで、 空いでだ桶さ 入つて隠れだず もな。	つたずもな。そ うすつと、その 女ア、見つけら れだと思つたが ら、その時ア、 はア、角ア生い ていだつたど。 むづくり、起き がつて、その男 をとつて食うべ どして、手出し たずもな。そ の男ア、押え られたぐねえが ら、走せだずも な。家の中、走 せでだずども、 なんとにもなん ねえがら、土間 サ出はつたずも な。土間サ出 はつてえは、空 こがアあつたず もな。その男ア、 その空こがの中 サ入つて隠れだ ど。	つたずもな。そ すど、その女ア むづくり、起き がつたずもな。 そのときハ、頭 さ角生いてあつ たど。そして、 その男取つて食 んべど手のべた ずもな。その男ア 押さらえたくね えずもな。家の中 走であるつて らつてわがねか ら戸あけて、戸 外サ出はつたず もな。そしたば、 空桶あつたつた ど。その男ア、 その空桶の中さ 入つて隠れだず もな。	言つたど。そうする と、その女が、「見た なア」つて、言つた たすが、そのときは、 口、耳まで裂けて、 角生がした山母だつ たんだど。さあ、そ の男は取つて食れた ぐねえから、走えつ たど。なんば走えで もわかんねえから、 戸外出て走え出はつ たところ、戸外の大 きな漬物樽あつたつ たずもな。その樽の 中さ入つて隠れだど。	つたずもな。そうすつ と、そのおなご、わ がられだと思つたど その時、はあ、角、 出でいだつたど。そ して、むづくり、起 上がつて、その男、 取つて食うべどした んだど。その男、家 の中、走せでだずも な。外サ出だずもな あつたつたずがら、 その男、空こがの中 さ入つて、隠れだど。	つて腹撫でたど。そうし たつけ、その女ア、氣い 付いたところア、ああ わかれたと思つたど。 「お前、みてらつたな」つ て言つたつたが「今度ア お前、とつて食んねもね え」つて、その男追つか へだど。さあ、その男ア おしえられたぐねえから、 あつちや逃げ、こつちや 桶さ入つたずもな。